

子どもを育む、母親の援助の実際と事例

芳 井 宏 暢

A fact and example of the help of mother bringing up a child

Hironobu Yoshii

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

子どもを育む、母親の援助の実際と事例

A fact and example of the help of mother bringing up a child

芳井 宏暢

Hironobu Yoshii

はじめに

「子ども」は、社会の宝である。

拡大家族から核家族へと、家族の形態が変化した今日では、子育ての責任が、若い親に集中するようになった。

また、地域の人間関係も希薄になり、子育てが親だけのものになり、その上、経済的理由や女性の社会進出により、共働き夫婦増加の中、時間外保育や休日保育を利用する家庭も増加しており、家庭での親子のかかわりの時間が減少している現状がある。

これからの幼児教育・保育は、保護者と地域との連携、多様な人間関係のネットワークの中で実践されていくことが求められていると考える。

1. 子どもを取り巻く環境の変化

近年、人間の生活が、便利で快適なものになった。現代の子どもたちは、テレビ・ビデオ・スマートフォン・タブレット端末・ゲーム・玩具などの「子守り役」が生まれた時から身の回りに存在する。

日本小児科学会では、「2歳以下の子どもには、テレビ・ビデオを長時間見せないようにしましょう。内容や見方によらず、長時間視聴児は言語発達が遅れる危険性が高まります。」という警鐘をしている。

「子どもは遊んで育つ」とよくいわれるが、子どもは、母親や他者からのコミュニケーション、つまり、子どもに分かりやすく話しかけ、子どもの話をゆっくり聞いて応えることが大切である。

言語能力に限らず、対人関係のスキルや社会性というものも、母親や他者との関わ

りの中で発達する。つまり「子守り役」ではなく、母親は、子どもにできるだけ多くの時間を他者（人）と関わることに費やし、その出会いの中で、多様な経験を積むことを通じ、人間は育つといえる。

人間（子ども）の心は、主に母親が育てていくものと考ええる。なぜなら、子どもにとって母親と接触している時間が一番長い。子どもと母親の日常生活の些細な出来事の積み重ねなどが、子どもの心を形成していると考ええる。

2. 母親の関わりの重要性

乳幼児は、母親と共に時間を共有し、安定した発達をすることができる。

しかしながら、女性の社会進出や少子化、ライフスタイルの変化などにより、子育てへの意識・感情にも変化がみられるようになった。若年世代ほど子どもの価値は、絶対的なものではなく、自分自身の成長や経験の上で価値があるという相対的なものとなってきている。また世代が若くなるにつれ、子育てを否定的に捉える傾向もみられている。このようなことから若年世代の親ほど育児の意義に対する評価が低い、あるいは子育てを否定的に見る傾向が増していると考えられる。

心理学者の詫摩武俊氏によれば、母親の態度と子どもの性格には次のような関係があるという。

母親の態度	子どもの性格
-------	--------

・ 支配的 ・ ・ ・ ・ ・ 服従 ・ 消極的 ・ 依存的 ・ 温和

・ かまいすぎ ・ ・ ・ ・ ・ 幼児的 ・ 依存的 ・ 神経質 ・ 受動的 ・ 臆病

・ 保護的 ・ ・ ・ ・ ・ 社会性の欠如 ・ 思慮深い ・ 親切 ・ 神経質ではない

・ 甘やかし ・ ・ ・ ・ ・ わがまま ・ 反抗的 ・ 幼児的 ・ 神経質 ・ 独立的

- ・服従的・・・・・・・・・・・無責任・従順ではない・攻撃的・乱暴・独立的
- ・無視・・・・・・・・・・・冷酷・攻撃的・情緒不安定の・想像力に富む
- ・拒否的・・・・・・・・・・・神経質・反社会的・乱暴・他人の注意を引こうとする・冷淡
- ・残酷・・・・・・・・・・・冷酷・強情・神経質・逃避的・独立的
- ・民主的・・・・・・・・・・・独立的・素直・協力的・親切・社交的
- ・専制的・・・・・・・・・・・依存的・反抗的・情緒不安定の・自己中心的・大胆

『子供は胎内で母体の強い影響を受けながら発育し、さらに出生後も母子相互作用によって、母親の強い影響を受けながら成長していく。母親が子供を腕に抱いて授乳することは生理的・心理的欲求を満たし、子供がはじめてあたたかい愛情に触れる機会をつくることによって、健全な「人」への育成をはかるという尊い使命をもっているのである』、『家庭は子供が両親の庇護の元に育っていく場であるとともに、家族との人間関係の中で社会性を身につけていく基本的な場である』¹⁾ というように、子どもの人生の出発点を預かり、その後の自我形成のために、母親としての責任は時代の変化があっても不変である。

子どもの心を育てるのに最重要の役割を果たすのは「母親」であると考え。子どもの心というのは、母親が育てていくものなのである。子どもの心の成長に関して、母親こそが最重要の役割を担うのであって、母親がいるからこそ子どもの心は健全に育って行くのである。なぜ母親が、それほどまでに重要な役割を担わされるのかというと、母親が「赤ちゃん」（我が子）を産むからなのである。どの母親でも、赤ちゃんを産む時には、その出産を命がけで行い、生まれて来た赤ちゃんを祝福するものだ。その一連の行為こそが赤ちゃんの心に決定的な影響を与えてしまう

のである。

子どもの性格はいくつかの要因によって作られるが、その中に「母親との関係」というのがかなり大きい。母親がいなかった子どもの場合、母親がいない事実＋母親の代わりの養育者とのかかわり合いが要である。

3. 保育所（園）や幼稚園の役割

保育所（園）は戦後の混乱の中、自らの生活を支えるために多くの保護者が我が子の保育ができない状況において「保育に欠ける」子どもたちを保育することに尽力してきた。現在でも社会の変化とともに働き方や働くことへの意識の時代の違いや色々な事情はあるにしても、家庭において我が子を保育できない子どもたちを受けいれ必要な時間保育を提供してきている。

現在のような核家族では、子どもの事について、身近に相談できる親類縁者もなく、地域の間人間関係も希薄であり、子どもが初めて出会う集団の場である保育所（園）や幼稚園は、母親の子育て支援や援助を行える。

例えば、保育所（園）や幼稚園では、母親と協力しながら、子どもたちが体も心も健全に育つように、いろいろな役割を果たすことができる。子どもたちをとりまく社会状況の変化を受け、母親との信頼関係を基礎にし、子どもたちの生活や心を安定させ、子どもたちの発達に応じた保育を行う。家庭ではできない経験や体験が長年研究した独創的なカリキュラムで系統的に組み入れ、遊びを通して子どもたちに提供できる。

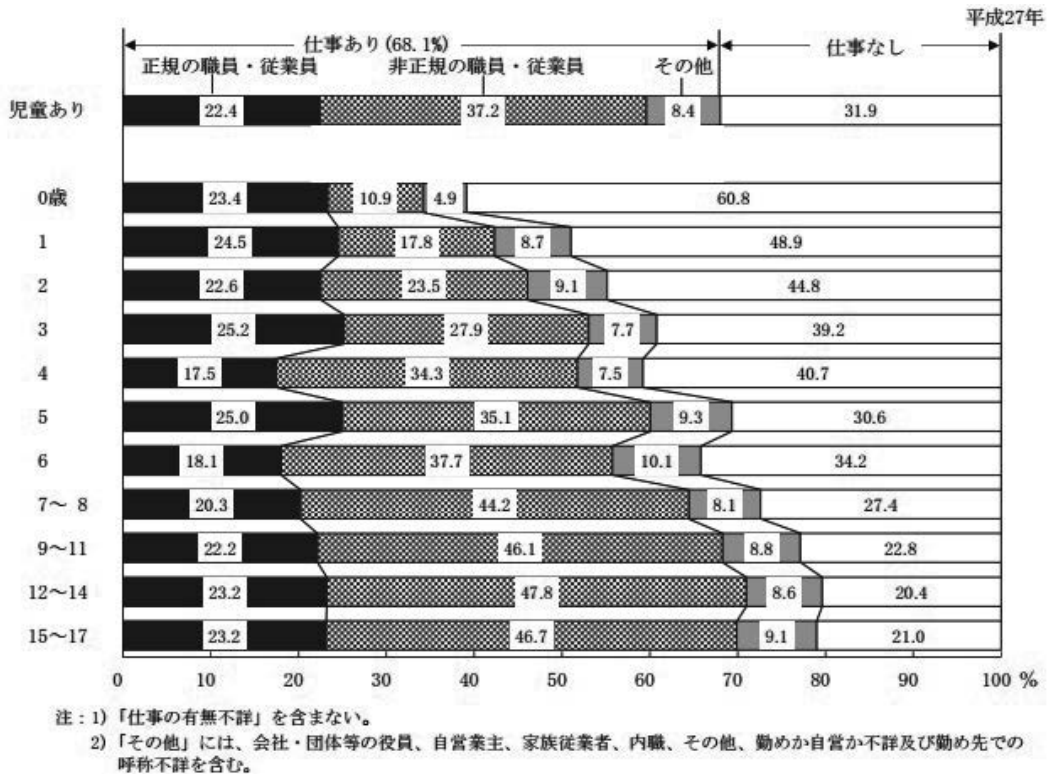
子どもたちにとって、保育所（園）や幼稚園と家庭は車の両輪のような役割を持つ。

子育てについて周囲から課されるハードルの高さ、夫の非協力、仕事を続けることの難しさなど、行き詰まりがある。個人レベルで見れば、夫からの協力もあり、自らの子育てに自信をもっている母親もいるが、孤立し、子育てに自信がもてず、もがき苦しんでいる母親もいるのである。

現在の日本は、晩婚化と少子化が進んでいるだけでなく、国際比較によれば、日本の母親は家庭生活に満足しておらず、子育てにも自信がもてないでいる。

1985 年「男女雇用機会均等法」が成立した。これにより女性の社会進出に対する取組みが積極的に行われるようになってきた。育児休業に関しても、数回の改正に

より育児休業取得率は上昇傾向にある。日本でも家庭と仕事のバランスを考えた働き方が普及しつつある。



(引用：厚生労働省 平成27年 国民生活基礎調査の概況)

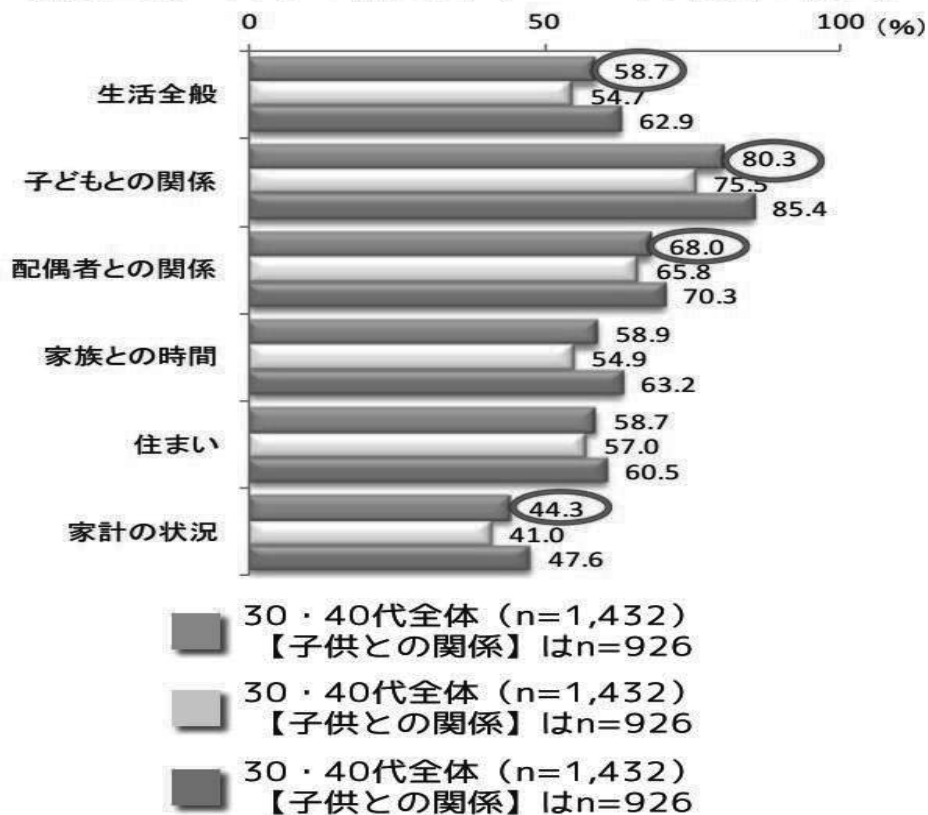
上記の厚生労働省の国民生活基礎調査の概況より、18歳未満の子どもがいて仕事をしている母親の割合は68.1%となり、2004年に統計を取り始めてから最も多くなっている。子どもが0歳の場合は母親は39.2%が働いている。これは会社の産休、育児休業制度を使用して休むことが出来るからであろう。注目は、1歳児の児童がいる間に働き始める母親が51.1%を占めるという点だ。約半数の母親が1歳児の子どもがいる間に働き始めている。

保育園にいれるため、仕事復帰を早くしたいため、その他色々な要因があり、早期に何かしらの就業を開始しているものと思われる。

4. 人とコミュニケーションし、自我を育てる

親自身の家庭生活への満足度が子どもの満足度に与える影響力が高くなることは、当然である。このことは、親自身が楽しくない家庭は、子どもにとっても楽しくないことを示している。親子の考え方は必ずしも類似性が高いはないだろうが、性格という点では、父親よりも母親との類似性が高いと考えられる。子どもにとって家庭生活の中心は親子関係にあり、親子関係がうまくいっているかどうかが家庭生活の満足度と大きく関わってくると思われる。子どもの心の形成は、育児や子育てを日々繰り返していく中に、自然に形成されていくだろう。

結婚生活に対する満足度（30・40代既婚の男女）



(出展：「20代～40代の恋愛と結婚 - 第9回 結婚・出産に関する調査より -
明治安田生活福祉研究所 2016年)

上のグラフは、結婚生活に関する満足度を表しているが、一番満足度が高いのが、「子どもとの関係」次いで「配偶者との関係」そして「生活全般」となっている。全ての項目で男性より女性の方が、満足と答えており、女性の方が結婚生活に前向きである。子どもや配偶者は、結婚したからこそ手にできる大きな存在である。

既婚者にとって、家族がいるという安心感は大きいといえる。

家族は、父親を頂点として形成されているように見えるが、実権を握っているのは母親である。

日々の生活の中で、子どもに最大の影響を与えるのは両親であり、とりわけ母親なのだ。子どもは、母親から様々なことを学び成長していく。

衣食住を柱とした日常生活が、子どもの成長と情緒の安定、そして自立支援にとって欠かせない意味を持つ。生活リズムを回復すること、子どもとしてケアされることは、自分が「大事にされるだけの価値のある存在」であることに、子どもが気づく体験になる。

家庭や地域の教育力が低下した現在、子どもたちの生活経験が乏しく、コミュニケーション力や自分をコントロールする力の低下が危惧されている。

幼児期には、人間としての基盤ができるときであり、人とのかかわりながら楽しさを共有し、生きる力を養う時期である。

精神科医の高橋龍太郎氏は「分離不安」という聞き慣れないことを指摘されている。0歳から3歳までの母親との過ごし方が、その後の人生に大きく影響を与えることを言われている。

このことを理解していると、子育てはとてもスムーズになると思われる。「分離不安」をクリアできずに大人になると人と人との適度な距離の取り方が分からなくなり、両極端な行動に走るようになる。

5. まとめ

赤ちゃんにとっては、この世に生まれでてくることは、不安で一杯なのである。両親が、赤ちゃんを肯定し祝福して、夫婦仲を良好にさせ、父親に対し我が子を祝福する状態に持って行く。

生後間もない赤ちゃんを世話することは大変である。母親は、自分への美、健康、

生理的欲求すら犠牲にして赤ちゃんを育てる苦労は、それまで自分の美しさを唯一の支えとしてきた女性にとっては耐えられない苦痛と映るかも知れない。

母親は、妊娠して 10 か月の間、妊娠期間がある。その期間に妊娠生活を楽しみ、出産を安全に迎えられるように、準備をしておく必要がある。胎児は、その様子をお腹の中から見て、母親のもとで育って行くのだ。

乳幼児の成長発達には、母親との結びつきが大切である。

以前に比べると最近父親の育児参加が多く見られるようになってきた。こうした父親の育児参加にもかかわらず、母親が子どもを過保護化、過干渉化する状況はむしろ増強されていると感じる。

働く母親が増えたことや、地域社会の変容、核家族化の進展などから家事・育児の担い手としての父親（夫）の役割が求められるようになっただけではなく、子どもの発達、母親の家事・育児負担の軽減、さらには家庭内の男女共同参画の点からも、夫の家事・育児への参加が求められるようになってきている。

総務省がまとめた平成 28 年社会生活基本調査によると、夫と妻の家事関連時間について、6 歳未満の子どもを持つ世帯の妻は、過去 20 年間で家事時間が 1 時間 1 分減少する一方で、育児時間が 1 時間 2 分増加している。また、共働き世帯の妻の生活時間は、仕事等が横ばい、家事が減少する一方で、育児は過去 20 年間で 30 分増加している。家事関連時間を男女別に平成 23 年と比べると、男性は 44 分で 2 分の増加、女性は 3 時間 28 分で 7 分の減少となっている。過去 20 年間の家事関連時間の推移をみると、平成 8 年に比べ、男性は 20 分の増加、女性は 6 分の減少となっている。しかし、男女の差は 2 時間 44 分と 26 分縮小しているが、依然として差は大きい。男性の家事や育児への参加は重要な課題である。男性が家事・育児を分担できるようにするために必要な対策が課題となってくる。

また地域における子育て支援として、平成 18 年 10 月から、創設された認定こども園があげられる。子どもにとってのメリットは、保育園と幼稚園を併せ持った施設なので、通園に関しては同じ場所であるということと、保育園児と幼稚園児で世代の違う子がいることで、異世代交流が進む。また、施設運営の側は、保育園と幼稚園で預かる子どもの情報交換ができるので、幼稚園生活スタート時点で子どもの性格や発達にあわせた環境作りがしやすくなる。また預ける保護者が失業したり、下の子を妊娠して産休や育休を取得すると、子どもがせっかく慣れた保育園を退園しなければいけなかったのが、継続して利用できるようになる。

内閣府の調査では、2015 年 4 月現在、認定こども園の数は全国で 2800 ヶ所余りで、内訳は、公立の施設が 554 ヶ所、私立の施設が 2282 ヶ所のあわせて 2836 ヶ所とな

っている。2017年4月には、全国で4001ヶ所へ倍増している。存在意義の違う保育園と幼稚園が一体となっていくには避けては通れない問題である。以前は、申請手続きが複雑だったために認定こども園になろうという幼稚園は増えなかった。

どこにいても同じ保育サービスを同じ施設環境で受けられることこそが、理想であり目指すべきゴールであるとする。

引用文献

- 1) 松本清一：母性看護学概論 第8版．医学書院，東京，pp4～62，1995

参考文献

- 1) 玉谷直美：女性の心の成熟、創元社、1985.
- 2) 大日向雅美：子育てと出会うとき、NHK BOOKS，1999.
- 3) 高橋龍太郎：仕事も人間関係も「いっぱいいっぱい」にならない方法、四六並製、2015.
- 4) 鎌田久子他：日本人の子産み・子育て—いま・むかし—、勁草書房、1990.
- 5) 山本高次郎：母乳、岩波新書、1983.
- 6) 高橋龍太郎：わたしの心は壊れてますか？、扶桑社文庫、2005.
- 7) 詫摩武俊：幼稚園児をもつ親の本—お母さんの心配に答える—、自由現代社、1981.
- 8) 山内芳忠：母乳栄養児の乳児期における成長に関する検討、平成9年度厚生省心身障害研究：子どもの健康に関する研究報告、1998.
- 9) 詫摩武俊：親と子の人生対話—子どもの心に火を燃やせ—、モラロジー研究所、1995.
- 10) 松川恵子・青井夕貴・西村重稀：認定こども園の現状と課題（3）～保育の内容等について～、仁愛女子短期大学研究紀要（第41号）、2009.
- 11) 詫摩武俊：伸びてゆく子どもたち—幼児期の家庭教育—、中公新書、1985.
- 12) 保育の友：特集—認定こども園の今、全国社会福祉協議会、2009.
- 13) 文部科学省・厚生労働省—幼保連携推進室ホームページ <http://www.youho.go.jp/>